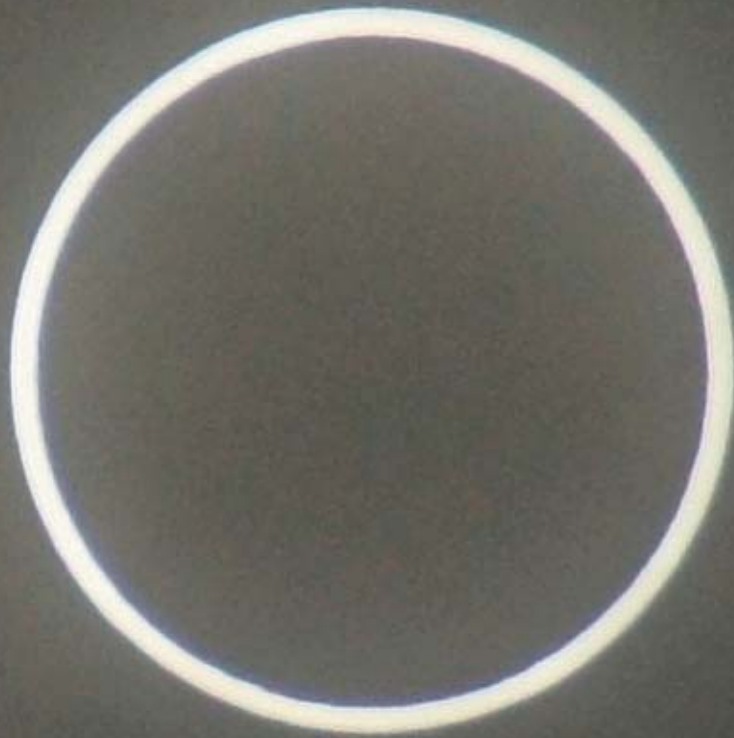


A・MUSEUM

vol.71
[2012.6.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



薄雲越しに出現した真円のリング（金環日食中心線上の行方市にて撮影）



観察会のようす

東の空に太陽のリング出現

日本全国各地で金環日食が見られた5月21日朝、当館では特別観察会「博物館で金環日食をみよう！」を実施しました。観察会がはじまった6時30分頃、太陽は厚い雲に覆われていましたが、時間の経過とともに雲が薄くなっていき、部分日食の太陽を観察できるようになっていきました。日食メガネや太陽観察専用の望遠鏡、大型モニターでのライブビュー映像などで日食進行中の太陽を観察するなかで、天候は完全に回復し、7時30分過ぎには光輝く太陽のリングが晴天の東の空に出現しました。およそ5分間にわたって繰り広げられた世紀の天体ショーに、参加者の皆さんからは感動の大きな歓声があがっていました。

（教育課 赤羽岳彦）

第55回
企画展

不思議いっぱい!貝たちの世界

- 蝸牛から烏賊・蛸まで -

The Wonderful World of Mollusks

貝のなかまは私たちにとってたいへん馴染みのある生きもので、味噌汁の貝やお寿司のネタなど、食用として利用されているだけでなく、道具、装飾品、染料などとして古来より珍重されてきました。また、貝のつくる殻はその美しい色彩や形態から、現在でも多くの人々を魅了し続けています。

そのような貝のなかまは「軟体動物」というグループに分類され、世界で約13万の現生種が知られています。このグループには、炭酸カルシウムの殻をもつものから進化の過程で殻を失ったものもいます。また、殻長1mmに満たない微小貝から全長10mを超える巨大なものまで大きさも実にさまざまです。さらに、生活の場も多様で、波打ち際から深海まで海に広く生息するばかりでなく、河川や湖、そして陸上と、極域から熱帯域に至る地球上のあらゆる環境に生活の場を拓いています。

今回の企画展では、さまざまな環境に適応した貝たちの形態や生態にスポットをあけるとともに、人々とのかわりについても紹介します。

この展示が、生物多様性を考えるきっかけ、そして自然からの恩恵を再認識する機会になることを願っています。
(資料課 池澤広美)

展示構成

プロローグ： ようこそ貝たちの世界へ

第1部： 貝の多様ななかまたち

第2部： イカ・タコ類の世界

第3部： 海にすむ貝類

第4部： 淡水にすむ貝類

第5部： 陸にすむ貝類

第6部： 貝類と人とのかわり

エピローグ： 貝たちの現在と未来



ヒタチマイマイ



カワニナ

(撮影:今井初太郎)



エムラミノウミウシ



ヒザラガイ

(撮影:鴨川 充)



ヒレシャコガイ



オウムガイ

会期 2012年7月7日(土)~9月17日(月)

開館時間 9:30から17:00まで(入館は16:30まで)

休館日 毎週月曜日

※7月16日(月)、9月17日(月)は開館し、翌日が休館となります。

※8月13日(月)は開館し、振替休館はありません。

企画展記念イベント

●自然講座「きみも今日からイカ・タコ博士?!」

日時:7月14日(土) 13:00~15:00

場所:博物館内 対象:小学生以上(小学生は保護者同伴)

定員:40名(先着順)

講師:奥谷喬司氏(日本貝類学会名誉会長)

●自然講座「貝の動物園をつくろう」

日時:8月4日(土) 13:00~15:00

場所:博物館内

対象:小学3年生以上

定員:35名(抽選)

講師:角田 元氏(かいのどうぶつえん 園長)

●自然観察会「筑波山のカタツムリを観察しよう」

日時:9月9日(日) 10:00~12:00

場所:筑波山(現地集合)

対象:小学4年生以上(小学生は保護者同伴)

定員:30名(抽選)

講師:上島 励氏(東京大学准教授)



日本財団 助成事業
The Nippon Foundation
船の科学館・海と船の博物館ネットワーク

この企画展は日本財団助成事業「船の科学館・海と船の博物館ネットワーク」の支援により開催いたします。

共に歩むかけがえのないパートナー

博物館ボランティア 1

博物館ボランティアは、1994年11月13日（茨城県民の日）の開館と同時にスタートしました。博物館と同じだけ歴史を刻み、今年で18年目を迎えています。「ボランティアは、博物館活動のかけがえのないパートナー」という位置づけのもと、博物館と来館者、博物館と地域を結ぶという重要な役割を担って来ました。発足当時は展示室での人員整理、DP（ディスクパリープレイス）での観察指導補助、発見工房での観察器具の貸し出し、サンデーサイエンス、友の会イベント補助など、手探りの状態からスタートしました。

現在は、県内外から約100名がボランティアに登録し、研修、化石クリーニング、イベント、DP/展示解説、里山、野鳥、植物、きのこ、昆虫、図書、友の会、ネイチャーゲームの12チームに分かれ、それぞれが自分たちで計画を立て活動しています。また、チームごとの活動だけでなく、サンデーサイエンス、ネイチャーウォークラリーなどのイベントの補助、ふれあい野外ガイド、とびだせ！子ども自然教室の運営、館内標本整理、野外の環境整備など、活動は多岐にわたっています。2011年の夏の企画展「昆虫 大冒険」では、企画展示室内にボランティアコーナーを設け、来館者

の対応やクイズの採点などを行い、新しい活動の可能性を見出しました。

当館のボランティアの大きな特徴とは、館とボランティアが、共に考え、共に歩いていくという姿勢にあります。みなさんは博物館野外にあるホタルの流れと田んぼをご存知でしょうか。これはホタルを博物館に自然発生できないかという発想から、池と田んぼ作りが計画されました。1997年2月8日の寒い中、ボランティアと職員総勢32名の手でスコップを片手に作業を行い、その日のうちにホタルの流れから水を引き、池と田んぼが完成しました。池と田んぼは、まさに博物館とボランティアの共同作業で作られたもので、今では夏にヘイケボタルが観察できます。

また、この田んぼや池には、メダカやオタマジャクシ、ザリガニなどが生息し、来館者の目を楽しませています。

このように、博物館のさまざまな行事や活動にボランティアが密接に関わっています。博物館にお立ち寄りの際には、青いジャンパーを着たボランティアの活動に注目して、気軽に話しかけてみてください。

（教育課 小泉直孝）



館職員とボランティアの共同作業でホタルの池と田んぼが完成（1997年2月8日）



昨年夏の企画展「昆虫 大冒険」でのボランティアコーナーのようす（黄色いボロシャツがボランティア）（2011年7月10日）

再会

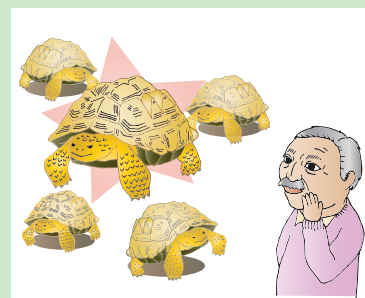
久しぶりに多摩地区にある市営の動物園を訪れた。小さな動物園だが展示なども良く工夫されファンも多い。目的はリクガメに会うことである。この動物園には我家で飼育していたケヅメリクガメが展示されているのだ。

このカメは大きくなりすぎて売れずペットショップで困っていたものをかわいそうだと思い購入した。白菜、人参、ドックフード等なんでも食べた。一番好んだのがクズの葉っ

ぱである。どこにでもあるため毎日採取し与えた。そして名前を呼ぶと寄ってきた。ヒーターを入れ野外で飼育したが、困ったのは庭に深い穴を掘ることである。力も強く花壇の柵など一気に壊す。3年程で体も重さも倍程の大きさになり一人では持ちあがらない。当時の園長が遊びに来た時にその大きさにびっくりしていたので差上げた。動物園で5頭程のリクガメと一緒に展示されたがやはり一番大きかった。展示場で名

コラム by director SUGAYA

前を呼ぶと寄ってはこなかったが、元気に暮らしていた。



イラスト：太田有香（ミュージアムコンパニオン）

霞ヶ浦を回遊するハゼ類

研究ノート1

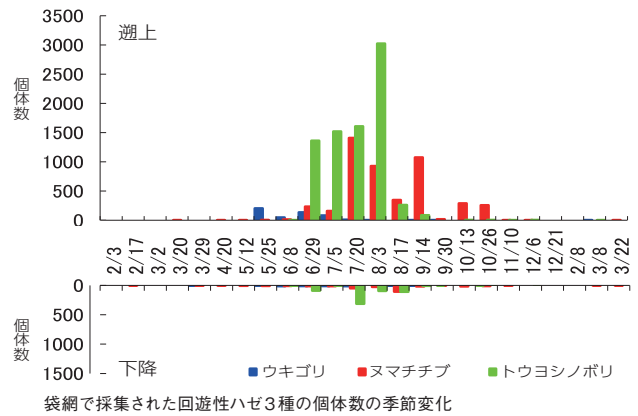
魚の中には、一生のうちに川と海を移動（回遊）する種がみられます。ハゼ科ではウキゴリやトウヨシノボリ、アマチチブなどが代表的な種です。これら回遊性ハゼ類3種の幼魚は、春から夏にかけて大群をなして河口域を遡上します。ウキゴリやトウヨシノボリ、アマチチブは茨城県内の川や河口に広くみられ、霞ヶ浦にも生息します。霞ヶ浦は常陸川水門によって海との関係が制限される特殊な環境にあることから、回遊性ハゼ類3種は霞ヶ浦と流入河川を回遊しているものと思われます。しかし、そのことを科学的に調査した報告はほとんどありませんでした。

そこで2008年2月3日から2009年3月22日にかけて霞ヶ浦の流入河川である小野川下流域（稲敷市稲波地先）において、回遊性ハゼ類3種の回遊に関するデータを集めました。調査には、幅が2m、長さが4mの袋網とよばれる小型の定置網2個を使い、小野川を遡上する魚と下降する魚を採集しました。

その結果、ウキゴリは5月25日に30~50mmの幼

魚が小野川を遡上しはじめました（グラフ・遡上）。続いてトウヨシノボリ幼魚（25~35mm）が6月29日に遡上しはじめ、8月3日にピークを迎えました。アマチチブはトウヨシノボリと同サイズで7月20日に増え、10月26日まで遡上が続きしました。

現在はこれらの回遊性ハゼ類が霞ヶ浦から遡上した個体であることを証明するために、炭素と窒素の安定同位体比を用いた分析を進めています。霞ヶ浦においてハゼ類は佃煮などの材料として重要な水産資源ですが、近年は不漁が続いています。回遊を含めた生態学的なデータが不足しており、原因がはっきりしていません。地味な調査ですが、霞ヶ浦の回遊性ハゼ類の保護に役立つデータを集められれば良いと思いながら続けています。（資料課 増子勝男）



上からウキゴリ、トウヨシノボリ、アマチチブの成魚



袋網で採集された回遊性ハゼ類の幼魚

梅雨の花 アジサイ

しとしとと雨の降る日本の梅雨。そのなかで青色に咲くアジサイの花は、梅雨に似合う花の代表格です。アジサイは昔から七変化とよばれ、咲きはじめからだんだんと色が変化してきます。これは、土壌の酸性度によって同じ品種でも赤や青に変わったりするのです。また、アジサイは地中から多量の水分を吸い上げる植物で、切花にするのは難しい花です。当館では、つたの森やホタルの流れ付近で見ることができます。

雨の日は家にこもりがちですが、そんな日こそ当館にアジサイをみに行っちゃいませんか。そして、アジサイの葉にいそうな生きものといえばカタツムリ。ところがカタツムリはアジサイをあまり好みではなく、葉を食べることもありません。アジサイの葉には、毒があり外敵から身を守っているのです。7月から開催される「貝」がテーマの企画展ではカタツムリもたくさん登場します。どうぞお楽しみに！

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—

(展示解説員 小磯慧里子)



青色に咲くアジサイの花

穴塚大池で絶滅危惧植物を調査

研究ノート2

つちうらししつが 土浦市穴塚には穴塚大池とよばれる溜め池があり、その池を中心におよそ100haほどの自然豊かな里山環境が広がっています。当館植物研究室では、この穴塚の里山を未来の子どもたちに引き継ごうと活動を続けている「認定NPO法人穴塚の自然と歴史の会」と連携して、穴塚の里山の植物調査を行っています。

この穴塚大池から西に伸びる谷は、通称「イナリヤツ」とよばれる谷津田になっています。谷津田とは、台地の小さな谷を利用してつくった湿田で、湿地特有のいろいろな動植物が生息し、生物多様性を守る意味でも注目されているところです。イナリヤツでは2002年までは稲作が行われていましたが、その後休耕が進み、2008年には全面が休耕田となりました。休耕田となったイナリヤツには、徐々にいろいろな植物が侵入して環境が変化しつつあります。

そこで、イナリヤツの休耕田に生育する植物を詳しく調べることにしました。調査は、休耕した時期などを参考にして休耕田を6つの区域に分け、それぞれの区域に生育している植物をすべて記録するという方法で、2011年5月から10月まで、時期を変えて4回行いました。

その結果、これまでに166種の植物を確認していま

す。その中には、湿地に特有の希少植物が多く含まれており、マルバノサワトウガラシ、ジヨウロウスゲ、ミズニラなど環境省や茨城県が指定する絶滅危惧植物6種が確認されました。

しかし、調査地に生育していた植物は希少植物ばかりではありません。ノダアカバナやセイタカアワダチソウのような外来植物やヤナギ類など木本植物もみられました。これらの植物は放置すると湿地の植生を大きく変化させる可能性があり、生物多様性に影響を及ぼすと考えられます。

これらの希少植物や外来植物は、ともに最後まで耕作が行われていた区域で多くみられました。このことは、耕作という人間によるかく乱は、希少植物の生育ばかりでなく、外来植物の侵入にも影響をおよぼすことを示唆しています。

このような植物調査の結果は、湿地特有の希少植物が育成する環境を維持するための基礎資料となります。

この調査結果をもとに、湿地の絶滅危惧植物を増やし維持するための方策を考えていきたいと思います。そして、今後もこの調査研究を継続し、すばらしい穴塚の里山環境を守る活動の手助けができれば良いと考えています。
(資料課 野堀秀明)



マルバノサワトウガラシ<環境省：絶滅危惧Ⅱ類>



穴塚大池調査風景

婚姻色

当館の水槽内には、日本にいる淡水魚が多く展示されています。そして、その大半が地味な色の魚です。しかし、春から夏にかけては水槽のようすが一変します。魚たちが、鮮やかな色へと変化を遂げるのです。からだに赤やオレンジのラインが入るウグイ。背びれなどがピンクや薄いブルーになるタナゴのなかまなど。

これは、一部の魚には産卵期に入ると婚姻色がからだに現れる種類がいるためです。婚姻色は、種によ

て現れる色が異なりますが、雌雄共に体色の一部が変化するものや、雄だけが鮮やかな色になるなど、そのバリエーションはさまざまです。そして、魚の行動が変化するのも特徴です。タナゴのなかまは、餌への執着が強まり、縄張り争いも増えてきます。

普段は地味な魚として見過ごされていますが、婚姻色が現れることで容姿も行動も異性へのアピールのために今までとは全く違う姿をみせて

おさかな通信

くれます。ぜひ、一度御覧ください。
(水系担当 大森教弘)



アカヒレタビラ (左♀右♂)

大型の鉱物・鉱石標本が寄贈されました

収蔵品紹介

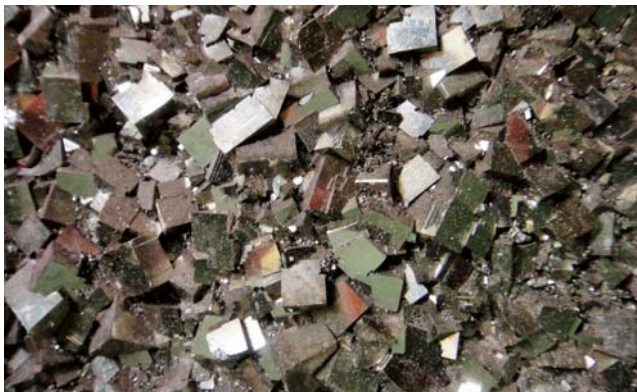
このたび、鉱物収集家の小室吉郎氏こむろよしろうから、鉱物・鉱石標本67点が寄贈されました。当館では現在、約9,000点の鉱物標本を所蔵していますが、そのうち2,604点は「小室標本」が占めています。これらは当館で大切に整理・保管され、展示にも活用されています。

日本にはかつて多くの鉱山があり、近代日本の産業を支えてきましたが、現在ではほとんどの鉱山が操業をやめてしまいました。このため、国内産の鉱物・鉱石標本は収集が難しくなっています。今回、小室氏から新たに寄贈された鉱物・鉱石標本は、まだ各鉱山が操業中に採取されたもので、大きさが30~50cmの大型標本も多数含まれており、たいへん貴重なものです。

標本の中には、水晶すいしょうや黄鉄鉱おうてつこう、方解石ほうかいせきなどの大きな

結晶を含み、展示に適したものがたくさんあります。たとえば、サイコロ状の結晶が密集した黄鉄鉱（秋田県・釈迦内鉱山産）は結晶面が美しく輝きます。また、鉱物ができたときのようすがわかる、学術的に価値の高い標本もあります。たとえば、白鉄鉱はくてつこうの中に半分埋もれた水晶（秋田県・小坂鉱山産）は両者がほぼ同時期にできたようすを示し、黄銅鉱おうどうこうの標本（秋田県・尾去沢鉱山産）からは、地下の岩盤の割れ目を流れていた熱水から水晶が結晶化した後、その表面やすき間に黄銅鉱が生成したことがわかります。

当館では、今秋に鉱物資源をテーマとした企画展「鉱」の開催を予定しており、今回の寄贈標本はこの企画展で紹介する予定です。（資料課 小池 渉）



黄鉄鉱（秋田県・釈迦内鉱山産）



白鉄鉱に半分埋もれた水晶（秋田県・小坂鉱山産）

ふしぎな生きもの 変形菌

季節の話題

変形菌へんけいきんは、名前に「菌」とありますが、いわゆる菌類や細菌類とは全く別の生物です。私たちが知る一般的な生物と比べ、非常に特殊な部分が見られます。

変形菌は、胞子がいっぱい詰まった数mm~数cmの子実体を形成します。胞子が発芽し成長が進むと、多核の単細胞のまま、餌となるバクテリアやカビを求めて這い回るアメーバ状の変形体となります。

このように、変形菌はなかまをふやすために胞子を形成するという植物的な面と、動きながら他の生物を取り込んで成長する動物的な面とを合わせもつ不思議な生物なのです。

変形菌のみどころは、ひとつは種によってさまざまな色や形をもった子実体しじつたいを作ることです。日本では400種以上みつっていますが、それぞれが実に個性的な子実体を形成します。卵のようなものや棒付きキャンディーのようなもの、小さな盃のようなものもあり、探す楽しみがふくらみます。もうひとつは、変形体から子実体へのダイナミックな変化です。ほんの数時間で色も形も全く異なる姿に一気に変化する様子は、みるものを圧倒するエネルギーを感じます。

変形菌は、餌となる微生物が豊富な朽ち木や落ち葉によくみられます。変形体は湿ったところを、子実体は風通しのよい乾いたところを探してみるとみつかることが多いですが、山奥に行かなければ見つからないわけではありません。学校の中庭のプランターやゴミ集積所の生ゴミ袋の上でたくましく生きる変形菌をみつけたこともあります。案外身近に潜んでいるこの不思議な生物を、梅雨の晴れ間を狙ってぜひ探してみてください。（資料課 宮本卓也）



食事中心の変形体（黄色の部分全体）

トピックス

○ロサンゼルス郡立自然史博物館の訪問

2012年3月21日～24日の日程で、当館の姉妹館である、ロサンゼルス郡立自然史博物館（以下ロス博）とその分館のジョージ・C・ペイジ博物館（以下ペイジ博）を、菅谷館長と私で訪問してきました。今回の訪問の目的は、姉妹館活動の進め方についての打合せと、当館でペイジ博から長期借用中のサーベルタイガー全身骨格についての状態の報告をすることでした。ロス博では、当館の10周年記念式典にも出席いただいたピサノ館長の他、教育部門担当副館長のワイズ博士、最近着任された研究部門担当副館長のロング博士に対応いただきました。ロス博は来年(2013年)が創立100周年ということで、祝賀行事の準備と、最新の研究成果に基づいた館内の展示更新及び野外施設の大規模な整備を進めていました。

ペイジ博では、何度も来日されているハリス博士と、新しいコレクションマネージャーのファレルさんらと会談しました。現在ペイジ博では、市内の地下駐車場建設現場から出土した化石資料のクリーニング作業が大忙しで、館内のタールピットからの化石発掘作業を一時中断しているとのことでした。(教育課 山崎晃司)



新設された恐竜展示室にてロング博士(左)、菅谷館長(中)、ワイズ博士(右)

○小貝川の絶滅危惧植物を観察しよう

4月8日(日)、常総市あらいぎ新井木こかいがわの小貝川河川敷にて、自然観察会「小貝川の絶滅危惧植物を観察しよう」を開催しました。当日は天候にも恵まれ、桜の咲きは始めるなかで、絶好の観察日和となりました。観察会では、絶滅危惧植物を保全するための野焼き活動の紹介や、小貝川でみられる春の植物の観察を行い、9種類(エキサイゼリ、シムラニンジン、トネハナヤスリ、ハナムグラ、ヒキノカサ、ノウルシ、ノカラマツ、ミソコウジュ、ヒメアマナ)もの絶滅危惧植物が観察できました。とくにヒメアマナは昨年よりも個体数が増えており、黄色い花が一面に広がるようすを観察できました。参加者からは「小貝川にこれほど多くの絶滅危惧植物があるのかが不思議です。」「茨城県にこれだけのレッドデータプランツがあることを知らなかつ

た。」「驚いた。この植物たちが健全に維持されることを願います。」「多くの絶滅危惧植物が生育する小貝川が身近にあることを誇りに思いました。」など、さまざまな感想が寄せられました。(教育課 小泉直孝)



小貝川での観察の様子

○自然観察会「茨城の金をたずねて」を開催しました!

八溝山地には、かつて自然金を採掘していた鉱山跡が散在しています。5月13日の自然観察会では、参加者27名とともに大子町たいごまろの塩沢しおざわ鉱山跡を訪れました。塩沢鉱山は、昭和10年代を中心に高品位の金鉱石を採掘していましたが、現在ではその面影はほとんどありません。自然金はおもに砂岩の割れ目にできた石英脈せきえいに含まれています。そこで、鉱山跡で石英を手にとって探してみると、小学生の参加者が石英の表面に金色に輝く3mmほどの自然金をみつけました。

次は沢で砂金探しです。予定していた大沢川の沢が増水していたことから、上流に移動して実施しました。自然金は沢に流れ込むと粒子どうしがくっつきあって、やがて数mmの砂金になることから、“パンニング”という全世界で広く行われている手法で探しました。まず、川底の砂を器に入れ、水中で揺らして比重が大きい砂金を器の底に沈めます。そして、余分な小石や砂粒をていねいに川に流していくと、器には黒い砂が残ります。この中から、黄金色にキラッと光る砂金を探します。しかし、なかなかみつかりません。砂金採りの苦労を実感しました。(資料課 小池 渉)



鉱山跡を流れる沢で砂金を探す

感動を呼んだレブンアツモリソウの開花



レブンアツモリソウ(上段)、アツモリソウ(下段左)、チョウセンキバナアツモリソウ(下段右)の展示

レブンアツモリソウの花

第54回企画展「植物たちのSOSーレッドデータブックからの警告ー」は6月10日に無事終了いたしました。皆さん企画展はご覧になっていただけましたでしょうか。

この企画展では、絶滅危惧植物を守る取り組みを臨場感あふれる展示を通してみていただくため、全国各地の植物園などに協力をいただいて、鉢植えの植物や水槽などを使って絶滅危惧植物の生体展示を試みました。

そして、そのクライマックスを飾ったのが、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園(北海道大学植物園)から提供していただいたレブンアツモリソウでした。レブンアツモリソウは北海道の礼文島^{れぶんとう}のみに分布するラン科植物で、その美しさから園芸的に人気のある植物として乱獲盗掘が絶えず、礼文島の1か所の保護区を除いてほとんど絶滅という状態でした。

北海道大学植物園では、この植物を救う手だてとして、遺伝資源の確保と園芸植物としての希少価値を下

げることを目的に、レブンアツモリソウの人工栽培に取り組んでいます。今回展示した鉢植えのレブンアツモリソウはこの事業で栽培されているもので、特別に札幌から4月末にフェリーと高速道路を使って運んでいただいたものだったのです。5月16日に咲き出したレブンアツモリソウの可憐な薄黄色の花は、多くの来館者に感動を与えてくれました。北海道大学植物園の方々には、感謝の限りです。これらの鉢は、会期の終了した6月11日には再びふるさとの札幌に戻るために当館を出発しました。(企画課 小幡和男)

編集後記

4月に博物館に赴任し、新緑のあふれる博物館野外施設で、大いにいやされています。朝夕の温度差も、寒さを感じる事が少なくなってきた今日この頃ですが、初夏の日差しを浴びた木々の芽吹きに自然の力強さを感じ、元気を分けてもらっております。今号からA・MUSEUMを担当することになりました。自然博物館を愛するたくさんの皆様に、博物館の良いところを伝えていきたいと思ひます。(j.t.)

【交通案内】



【車ご利用の場合】

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
【鉄道・バスご利用の場合】
- つくばエクスプレス守谷駅下車
～関東鉄道バス「岩井行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- 東武野田線愛宕駅下車
～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
※事前に発車時刻等をご確認ください。



【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開演時	通常時		
一般	720円 (580円)	520円 (420円)	200円 (100円)	1,500円
高校・大学生	440円 (300円)	320円 (200円)	100円 (50円)	1,000円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	300円

(注):()内は団体料金(20名以上)
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。
次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日)
- 6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日)
- 春分の日
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

- 毎週月曜日
- ※7月16日(月)、9月17日(月)は開館し、翌日が休館となります。
- ※8月13日(月)は開館し、振替休館はありません。
- ※6月18日(月)～6月23日(土)は、館内整理のため休館となります。



自然博物館ニュース A・MUSEUM(ア・ミュージアム)

A・MUSEUM (AMUSEMENT+MUSEUM)

企画・編集:ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2012年6月15日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL0297-38-2000 FAX0297-38-1999
URL <http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>
E-mail webmaster@nat.pref.ibaraki.jp
メールマガジンも配信中。登録はホームページから

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。